

東鑑

四十一

穿

庫	文	閣	内
一 函	三 三 四	五 一 冊	和 書 類

578

内閣文庫	
番號	和 33004
冊數	51 (41)
函號	148 32

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C Y M

© Kodak 2007 TM Kodak



新刊吾妻鏡卷第四十一

建長三年辛亥

正月小

一日 壬戌天晴風靜也。

椀飯相州御沙汰進物

役人

前右馬權頭 御調度 陸奥掃部助

御行騰

佐渡前司 相摸八郎時隆

一御馬

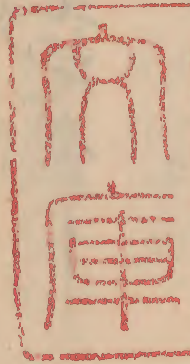
相摸式部大夫時弘

二御馬

武藏四郎時仲 同五郎時忠

三御馬

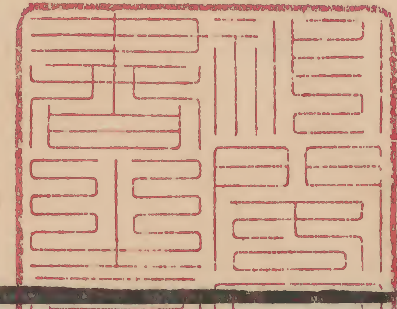
遠江六郎左衛門尉時連



同新左衛門尉經光

四御馬

上野彌内郎右衛門尉時光 同十郎朝村



五御馬、和泉次郎左衛門尉行章出羽三郎行資
今日將軍家并若君御前等有御行始之儀相州御
第入御

供奉人

將軍御方

前右馬權頭政村

武藏守朝直

陸奥掃部助實時

宮内少輔泰氏

北條六郎時定

越後五郎時家

佐渡前司基經

大藏權少輔朝廣

小山出羽前司長村

下野前司泰經

新田三河前司頼氏

前太宰少貳為佐

遠山前大藏少輔景朝

内藏權頭資親

安藝前司親光

能登右近大夫仲時

大隅前司忠時

内藤肥後前司盛時

筑前々司行泰

薩摩前司祐長

遠江次郎左衛門尉光盛

武藤右衛門尉景頼

大曾稱左衛門尉長泰和泉次郎左衛門尉行章

攝津新左衛門尉
常陸次郎兵衛尉行雄

本間次郎兵衛尉信忠

小野澤次郎時仲

若君御前御方

尾張前司時章

遠江守時直

相摸右近大夫將監時定

相摸八郎時隆

郡波左近大夫政茂

上野三郎國民

縫殿頭師連

越中前司頼業

伊勢前司行經

三浦介盛時

伊賀二郎左衛門尉光房

式部六郎左衛門尉朝長

出羽次郎左衛門尉行有 壹岐太郎左衛門尉

大須賀次郎左衛門尉胤氏

肥後次郎左衛門尉景氏

彌善太右衛門尉康義 隱岐新左衛門尉時清

大曾祢五郎

二日 癸亥 梶飯奥州御沙汰

御劔 武藏守朝直 御調度相摸式部大輔時弘

御行騰 下野前司泰經 村擲三郎兵衛尉

伊賀前司時家 城二郎頼景

- 一御馬 陸奥彌内郎時茂 淺羽左衛門尉次郎
- 二御馬 下野七郎經經 同三郎兵衛尉廣經
- 三御馬 上野五郎左衛門尉重光 同次郎光時
- 四御馬 出雲五郎左衛門尉宣時 尾張次郎公時
- 五御馬 遠江六郎教時
- 三日 甲子 梶飯左馬頭入道正義沙汰
- 御劔 宮内少輔泰氏 御調度秋田城介義景
- 御行騰 新由三河前司頼氏 同次郎顯氏
- 一御馬 足利三郎家氏 太平左衛門尉
- 二御馬 上野三郎國氏 同新左衛門尉經光
- 三御馬 遠江六郎左衛門尉時連 同三郎行時
- 四御馬 出羽次郎左衛門尉行有 同二郎

五御馬 三村新左衛門尉時親

四日 乙丑天霽 丑刻塔辻燒亡人屋數十字災

大藏權少輔朝廣之家在其中累代相傳地券文書

以下重寶書以火燼云

五日 丙辰天霽 二位殿并二棟御方等御行始

秋田城介義景甘繩第入御

供奉人 布衣下袴騎馬 總鞍

二位殿御方

備前々司時長

相摸三郎太即時成

出羽前司長村

上野三郎國氏

遠江右近大夫將監時兼

那波左近大夫政茂

新由三河前司頼氏

縫殿頭師連

遠江六郎左衛門尉時連彌一即左衛門尉親盛
攝津左衛門尉 常陸二即兵衛尉行雄
出羽三即行資

二棟御方

陸奥掃部助實時

相摸式部大夫時弘

内藏權頭資親

越中前司頼業

伊賀前司時家

豐後四郎左衛門尉忠經

肥後二郎左衛門尉景氏

和泉二郎左衛門尉行章

北條六即時定 以上御

越後五即時家

安藝前司親光

大隅前司忠時

式部六即左衛門尉朝長

大曾祢次郎左衛門尉盛時

和泉五郎左衛門尉政泰

筑前二郎左衛門尉行賴

七日 戊辰天霽 於幕府有女房勝負二位殿二

棟御方等御會合相州之室御衆云云

八日 己巳天晴 營中心經會也將軍家出御今

日相州金銅藥師如來像八寸被令鑄御產平安之

御祈請之為也工藤三郎左衛門尉光泰奉行之則

被遂供養鶴野別當法印為導師又長白藥師供并

信讀大般若經被始行云云

次由比濱御弓始被撰射手陸奥掃部助監臨之武

藏守遠江守北條六郎以下為見物而被行向云射

手十七人

一番 武田五郎七郎 早河次郎太郎

二番 橫溝七郎五郎 桑原平内

三番 布施三郎 小野澤二郎

四番 平井八郎 薩摩九郎

五番 眞板五郎二郎 池田五郎

六番 佐貫彌四郎 諏方兵衛四郎

七番 多賀谷彌五郎 工藤右近三郎

八番 河野右衛門四郎 一色四郎左衛門尉

九番 棗右近三郎 獨弓

九日 庚午 政所問注所等勝負延年云云

十日 辛未天霽 今日御弓始之義奥州相州前

右馬權頭宮内少輔等出仕云。
射手十人葛祿淺履 一二五度射之

武田五郎七郎政平
早河二郎太郎祐泰

二番 横瀨七郎五郎忠光 桑原平内盛時

三番 多賀谷彌五郎重茂 諏方兵衛四郎盛頼

四番 布施三郎行忠 眞板五郎二郎經朝

五番 棗右近三郎 平井八郎清頼

十一日 壬申天霽 將軍家參鶴置八幡宮御束

帶御劍笏經代之御車也

行列

先諸大夫八人

星野出羽前司季義 出雲權守爲政
近江前司季實 押立左近大夫資能
少輔木工助廣時 安藝右近大夫親繼
安藝左近藏人重親 和泉左近藏人

次殿上人十人

安野中將隆兼 尾張少輔清基
二條少將兼教 藤少將實遠
前左兵衛佐隆氏 一條少將能清
前治部少輔經章 中御門侍從宗世
前兵衛佐忠時 六條侍從公實

次御車

梶原右衛門三郎景氏 伊賀式部八郎兵衛尉

三村左衛門尉時親

武藤次郎兵衛尉頼泰

大曾孫左衛門太郎長繼

善左衛門次郎康有

内藤豊後三郎

小野澤二郎時仲

肥後四郎兵衛尉行定

山城二郎兵衛尉信忠

伊東三郎

平右近太郎

以上直垂帶劔候御車左右

次御劔役人

武藏守朝直

次御調度懸

武藤左衛門尉景頼

次御後供奉人 布衣下袴

相摸右近大夫將監時定

陸奥掃部助實時

遠江六郎教時

武藏四郎時仲

足利三郎家長

内藏權頭資親

新田三河前司頼氏

遠山大藏少輔景朝

伊賀前司時家

大隅前司忠時

伊勢前司行經

遠江二郎左衛門尉光盛

大曾孫左衛門尉長泰遠江六郎左衛門尉時連

梶原右衛門尉景俊大曾孫彌次郎左衛門尉盛經

彌善太左衛門尉康茂 攝津左衛門尉

和泉五郎左衛門尉政泰

十五日 丙子天晴 將軍家二所御精進始也仍

二所并若君御前右馬權頭弟入御々物詣之間可

有御座云

十七日 戊寅天晴 於相州御弟而放光佛像被
供養導師鶴聖別當法印又被修如意輪護摩是皆
御産御祈也

廿日 辛巳天晴 將軍家一所御進發也

行列

前陣隨兵十二騎

葛西七郎時重

野本二郎行時

佐野八郎清經

肥前太郎資光

豐嶋平六經泰

千葉七郎次郎行胤

江戸八郎

佐貫七郎廣經

山上彌四郎秀盛

佐貫次郎太郎泰經

山田四郎通重

東四郎義行

次御引馬三走

次御弓袋差

次御鎧

次御甲持

次御具足

次御調度懸

持壽丸

次御油

次御先達

次御駕

三村新左衛門尉時親
式部八郎兵衛尉

肥後四郎兵衛尉行定
内藤豊後三郎

武藤二郎兵衛尉頼泰

藤倉三郎盛義

梶原右衛門三郎景氏

小野澤二郎時仲

澁谷二郎太郎武重

山城次郎兵衛尉信忠

平右迄太郎

土屋新三郎光時

攝津新左衛門尉

兼仗太郎

平井八郎清頼

已上十五人御駕之在左右

御後

尾張少將

中御門少將

武藏守

相摸右迄大夫將監

陸奥掃部助

相摸式部大夫

北條六郎

越後五郎

遠江六郎

武藤四郎

相摸八郎

同三郎太郎

足利三郎

新田三河前司

内藏權頭

遠山前大藏少輔

大隅前司

内藤肥後前司

伊賀前司

伊勢前司

上野彌四郎右衛門尉

同三郎兵衛尉

大曾彌次郎左衛門尉

遠江二郎左衛門尉

梶原右衛門尉

和泉五郎左衛門尉

出雲五郎右衛門尉

波多野小次郎

信濃四郎左衛門尉

筑前次郎左衛門尉

武藤左衛門尉

和泉次郎左衛門尉

出羽三郎

山内藤内左衛門尉

阿曾沼小次郎

鎌田次郎兵衛尉

後陣隨兵十二騎

阿曾沼四郎次經

清久彌二郎秀胤

國分二郎胤重

小栗彌二郎朝重

眞壁小次郎

長江七郎景朝

廿一日 壬午天霽

出羽四郎左衛門尉

隱岐三郎左衛門尉

紀伊次郎左衛門尉

近江大夫判官

木村六郎秀親

高柳四郎三郎行忠

推名六郎胤經

善右衛門次郎康有

麻生太郎親轉

足立左衛門三郎元氏

相州室為御平産日泰山

府君祭於被始行泰房奉仕之供祈者秋田城介義景沙汰也

廿五日 丙戌天霽 從二所歸著一昨日昨日兩

日雪降甚路次之御煩也

廿八日 巳丑 相州御方信讀大般若經等結願

廿九日 庚寅 信濃國諏方之社去廿日烏五十

計聚皆死之由大祝申云

二月大

一日 辛卯天晴 鶴野綸旨之祭御神樂如例今

日京都之使者奏著去月廿二日北政所御産云又

二日 式乾門院崩御同

六日 丙申天霽 申刻雷鳴

十日 庚子天晴 打繩邊燒亡。從火地相法橋之

宅起。自戌刻到子之一點不止。東若宮大路。南由比

濱。北中下馬橋。西佐々目谷也。相摸右近。大夫將監

時定相摸。八郎時隆等弟以下數箇所災。今日相

州自染筆被猷御書於二條殿。向後御心安可存之

由云

廿日 庚戌 大御所 此間新造葛西谷口河俣。後

山崩顛人多以被推土石之谷而二人立亡云

廿四日 甲寅 於前右馬權頭弟當座三百六十

首有繼歌二條中將尾張少將武藏守遠江守佐渡

前司鎌田次郎兵衛尉等會合以二百六十種重寶

欲置物云

三月大

六日 丙寅 武藏國淺草寺如牛者忽然出現奔

走于寺于時寺僧五十口計食堂之間集會也見件

之怪異廿四日人立所受病痲起居進退不成居風云

七人即座死云

七日 丁卯 去月十四日熊野山神倉燒亡此事

兼日相州在御夢想之間殊驚噪賜造營等事有御

助成之由云

九日 己巳天霽 風靜也今日相州於御第被供

養法華經形木鶴置別當法印為導師是依年來御

素願乎自今事功令修結云

十日 庚午天晴 將軍家永福寺之花御覽被持
女房與武藏守相摸右近大夫將監相摸式部大夫
以下為供奉云

十四日 甲戌 去比信濃國諏方社頭湖大嶋井
唐船等出現片時之間如消而失云此事無先規之
由社家驚申云

十五日 乙亥天晴 永福寺恒例之法會也前右
馬權頭武藏守等衆堂云今日相州造立羅計二皇
令供養賜各可被祈御運賜依事也

四月小

十三日 癸卯天晴 相州鷲大明神為奉幣可遣
御使於武藏國之處三嶋之神事也他社御奉幣事

敢可有其憚之由當社神主申仍被讓子細於若宮
別當法印之間今日進發云

廿日 庚戌 國司領家年貢事殊可致精誠辨濟
若春三月已後就此事本所訥詔出來者可被地頭
於本所申分之由被仰出云

廿二日 壬子兩 若宮別當法印自武藏國鷲宮
歸衆御祈願成就奇瑞不一去十九日於社頭御神
樂之砌一之見事詔宜尤嚴重殊有其奇特之由云

廿三日 癸丑 甚雨自廿一日未止今夜子尅洪
水村里家耕所苗悉以流失云

廿六日 丙辰 去十九日上野國赤木嶽燒為先
例兵革兆之由令在廳等申之由云

五月大

一日 庚申天霽

相州室家産所騾ハシ被始ハシ

御祈禱等行トクニヒト

三日 壬戌天陰

若君御前ワカキニ不例セシ頗御辛苦ナレ諸

人群集營中周章クシメテ

五日 甲子

入道相摸ハシ三郎平資ハシ率ヒキツケ年ニ修ス

理權大夫時房朝臣トキフネ三男也ハシ三番之引付頭人也ハシ

八日 丁卯

以河越修理亮重資カハコシ去貞永元年十

二月廿三日任廳堂ニ可令有武藏國ニ松檢校職之旨ハシ

被仰出ササ云

十四日 癸酉天晴

彼御産之事カ可為明白キ西刻ニ

之由若宮別當法印ト

降辨ト依被申ササ衆集人々ハシ悉退散ハシ

云

十五日

甲戌天晴

風靜也今朝相州以テ安東五ト

郎太郎為御使被送御書於若宮別當法印ト

隆ハシ弁ハシ禰ハシ

女房産之事日來可為今日之由雖被仰于今無其キ

氣分之間御存知之旨頗不審ハシ云ハシ獻返報申ハシ今日西ト

尅可為必定不可有御不審ハシ云ハシ於申刻漸御氣分出ハシ

現之間醫師典藥頭時長朝臣陰陽師主殿助ト泰房ハシ

驗者清尊僧都并良親律師等衆候ハシ酉終刻法印ハシ

衆加而奉加持之則若君誕生奥州兼而被座ハシ此外ハシ

御一門之老若摠而諸人衆加不可勝計頃之御驗ハシ

者以下祿各可賜生衣一領野劔一柄馬一疋也于ハシ

時三浦介盛時ハシ白直垂ハシ馳衆持悅之餘騎用所之馬ハシ

以置銀鞍自令引泰房與是名馬也大嶋鹿毛云抑
此誕生祈禱之事對相州若官別當法印不等閑被
付示之仍於鶴堂八幡宮寶前從去年正朔碎冊誠
肝膽夢告有之同八月令准可賜之由被申之上今
年二月侍伊豆國三嶋社壇而祈請之間同十二日
寅刻夢告白髮老翁法印曰祈念所之懷婦來五月
十五日酉尅可男子於平產也云果如旨音特可謂
歟
廿一日 庚辰 七夜事奥州令盡經營賜云
廿七日 丙辰 天晴 新誕若君公令歸住本所賜
其後募御祈之賞以能登國諸橋保若官別當法印
被避工藤三郎左衛門尉光泰為鄉使相州御書云

今度男子平產併所致法驗也就中兼日之仰一事
無相違不言語之及所云今夕酉尅南風惡由比濱
之民居燒亡延御所之南到隣人家則南面棟門之
災難今之營中希有而遺餘災云
廿九日 戊子 天霽 相州室御產之後有痢病之
惱已及數日然押有沐浴事有忽減氣屬之可賜之
由被別當法印申產穢雖不幾入產所可被為加持
之由相州頻依有御所望則衆入奉加持云
六月小

五日 甲午 天霽 有評定此事每度日來有盃酒
椀飯等之儲又當炎暑之節者召寄富士山之雪所
為備珍物也彼是以無民庶之煩休被止之善政隨

二云。次五方引付更被結番之爲六方。秋田、城介義景、輕服之後始出任奉行此事云。其番文云。

一方

前右馬權頭政村

常陸入道行日

大曾祢右衛門尉長泰

山城前司俊平

新江民部大夫以基

二番

武藏守朝直

大田民部大夫康連

武藤右衛門尉景頼

中山城前司盛時

山名進二郎行直

三番

尾張前司時章

對馬守倫長

清左衛門尉滿定

長田兵衛太郎廣雅

越前四郎經成

四番

攝津前司師貞

出羽前司行義

伊勢前司行經

山名中務俊行

皆吉大炊助文幸

五番

伊賀式部大夫入道光西

秋田城介義景

伊豆前司行方

明右左近將監兼經

内記兵庫亮祐村

六番

信濃民部大夫入道行然

筑前々司行泰

東鑑四州

廿四

甲斐前司 泰秀

越前兵庫助 政宗

太田 太郎兵衛尉 康宗

十日 巳亥 貴處伺候於女房者可有領家之號

之旨被定之云又曰百姓與地頭相論之事別差奉

行人定委細尋可被聞食之由云

十五日 甲辰 攝津前司師負朝臣依病疴而被

遂出家法名行嚴云

十九日 戊申天晴 若君御前不例令平裁賜云

廿日 己酉 引付之事雖被結番之重々被歷其

左右縮六方欲三方

一番

前右馬權頭

攝津入道

和泉前司

筑前々司

大曾祢右衛門尉

清左衛門尉

中山城前司

明石左近將監

對馬左衛門尉

越前四郎

二番

武藏守

出羽前司

伊賀式部大夫入道

太田民部大夫

對馬守

武藤左衛門尉

山城前司

越前兵庫助

皆告大炊助

進士次郎藏人

山名進次郎

三番

尾張前司

信濃民部大夫入道

秋田城介

常陸入道

伊勢前司

山名中務直景

伯耆右衛門尉

内記兵庫允

長田兵衛太郎

廿一日 庚戌 閑院殿末俊所之事有其沙汰被

施行之所謂築壇百七十八本此内小路面十本在

不立二條面七十二本油小路面六十本自二條北

油小路面西洞院面三十五本新造又神社佛寺領

之外悉可所課於辨勤之由同被仰下御教書云

造閑院殿用途事

右於佛神之田者自本被除之到其外者令濟地

頭加徵之所之者可致其沙汰之由各可加下知之狀依仰執達如件

建長三年六月廿一日

相摸守

廿二日 辛亥 小雨

前攝津守下中原朝臣師負法名ハシラス率歳六助教師モロ

茂男也

廿六日 乙卯 小雨降 冷氣尤甚有氷如冬夫云云

七月大

四日 壬戌 半晴 半陰寒氣猶未止今日京都之

飛脚到來去月廿七日被遷閑院遷幸造内裡廷賞

將軍家令叙三品給相州正下被叙五位又彼時衆

仕公卿以下衆狀并除書等持衆之云云

從三位藤原頼嗣

造閑院賞

從四位上藤原隆顯父大納言藤原朝臣

藤原顯雅

同經後閑院行事賞

正五位下平時頼

造國司賞

建長三年六月廿七日

從三位藤原頼嗣

左中將如元

左大夫小槻淳方

左衛門少尉中原章職

已上行事賞追可申請

左大將定雅

右大將公相

萬里小路大納言公基

權大納言實雄

三條大納言公親

今出川新大納言實藤

一條中納言公時

別當通成

花山院權中納言師繼

新中納言

佐宰相

新宰相

松殿三位中將

左兵衛督

中御門三位侍從

佐三位

新宰相

左近

近衛中將實春

高倉中將公陰

左中將基雅

持明院少將相保

三條新少將守資

入條少將公益

近衛新少將公春

右近

九條中將能定

楊梅少將經忠

楊梅新少將忠資

高倉少將茂通

法性寺少將雅任

左衛門

權佐

右衛門

權佐

左兵衛

佐親朝權佐行時

右兵衛

右中將伊賴

三條少將伊基

右少將資氏

小野宮少將俊具

佐高望

左馬

權頭景氏

右馬

權頭伊信

鈴奏

藤少納言基時

反閉

陰陽頭良光朝臣

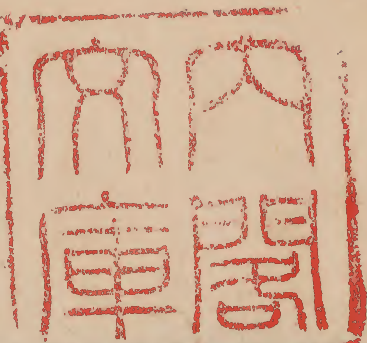
出車

近衛源少將資平

丹波守

權助經衡

丹波少將賴親



八日 丙寅天晴 風靜。今日相州室自產所令歸
 住本里之亭賜云。又將軍家令叙三品賜之後事更
 於政所成御下文云。
 十日 戊辰 今日評定奴婢子十歲未婦雖過同
 者不依年紀之由被定下是青木入道依所從之事
 也。

十八日 丙子天陰 雪降。奥山本三嶋之社為令
 奉勸請卜其地賜云。

廿日 戊寅 諸國民間訥詔於出來者面收以前
 召符不可下之旨。今日政所問津所等被仰云。

廿六日 甲申天晴 夕雨下。雪下有。三嶋新宮上
 棟之義云。

卅日 戊子 雨降。凡此間風雨涉日。壤風災為令
 看西收豐稔祭風伯可奉仕之由。被仰銜陰陽之道
 云。詔方兵衛入道為蓮佛奉行云。

八月小

一日 己丑天晴 南風惡。今夕於由比浦被行風
 伯之祭。國繼為親等奉仕之為。伊豆太郎左衛門尉
 實保御使云。

二日 庚寅天晴 風甚。但入夜
 三日 辛卯天霽 風少。今夕雪下。及三嶋新宮遷

宮之義。陪從御神樂有童舞延年等云。
 六日 甲午 勝長壽院小御堂者。故禪定二位

家御遺跡。盤觴異他。然近年及破壞其跡已欲改。仍

為被加修理以紀伊國雜賀庄募料所於不日可終
功旨今日被仰備後前司康持付云
十五日 癸卯天陰 風吹今日鶴置八幡宮放生
會也將軍家御出

行列

先陣隨兵

阿波四郎兵衛尉政氏

上野五郎兵衛尉重光

葛西壹岐新左衛門尉清貞茂木左衛門尉知定

和泉次郎左衛門尉行章武藤次郎兵衛尉頼泰

足利三郎家氏 城九郎泰盛

遠江六郎教時 越後五郎時家

次諸大夫

次殿上人

次公卿

次御車

大曾祿五郎

伊東大和十郎

土肥左衛門四郎實經

同三郎泰祐

小野澤次郎時仲

大泉九郎長氏

伊勢加藤左衛門尉

紀伊四郎左衛門尉

鎌田兵衛三郎義長

濱名三郎

山城二郎兵衛尉

肥後彌藤次

已上著直垂帶劔候御車左右

次御劔役人

尾張前司時章

次御調度役人

武藤左衛門尉景頼

御後布衣

相摸右近大夫將監時定

北條六郎時定

宮内少輔泰氏

上野前司泰國

小山出羽前司長村

前大藏權少輔朝廣

内藏權頭資親

出羽前司行義

新田三河前司頼氏

和泉前司行方

後藤壹岐守基政

遠江次郎左衛門尉光盛

梶原右衛門尉景俊

城次郎頼景

式部六郎左衛門尉朝長彌土郎左衛門尉親盛

豐後四郎左衛門尉忠經大曾祿左衛門尉長泰

出羽二郎左衛門尉行有

隱岐二郎左衛門尉泰清

彌善太郎左衛門尉康義

肥後次郎左衛門尉為時

善右衛門尉康長

攝津左衛門尉

後陣隨兵

大曾彌左衛門尉盛經

常陸二郎兵衛尉行雄

田中右衛門尉知繼

伊豆太郎左衛門尉實保

小田嶋五郎左衛門尉義春

紀伊五郎左衛門尉為經

武右四郎左衛門尉朝長

足立左衛門三郎元長

大須賀新左衛門尉朝長

是立太郎左衛門尉直元

十六日 甲辰 去夜丑刻雨降已尅晴南風吹今

日鶴血流鎬馬以下馬場之義如禮將軍家有御奉

幣供奉人等同昨日

廿一日 己酉天晴 將軍家於此浦御出前右

馬權頭武藏守老若無不扈從奥州相州豫被候御

棧敷入御之後先有献盃義次覽遠笠懸則又令射

之給御箭頻的中人感焉申次大逐者有之諸遠繩

內候敷皮石頓射手各衆繩際之時壹岐前司有泰

經確執之氣之由稱之急以故障之間彼合手城九

郎泰盛同下馬畢宴遊障碍也泰經代而可差伺候

之人進之旨被相州申相州殊固辭縱射手雖有之

數輩差御家人置難進差焉况又於無其人而耶各

不可然之由云然仰依再三令進橫溝五郎給被用

意橫溝之具足之間相州御弓箭行騰賜焉御鎧唐

在皆引目等被持馬者內嶋右近入道點騎馬給御

未立馳繩際筆只用子駕之仍今始拭汗敢騎之隨

檢見數交催促雖衆加猶有斟酌無左右不發箭云

放犬四疋及之時始射之始中終無其矢今日逸興

此事也

尾張前司

相摸右近大夫將監

陸奥四郎

武田五郎七郎

信濃四郎左衛門尉

加賀前司

幸嶋次郎

加地五郎次郎

遠江次郎左衛門尉
小山出羽前司
大追者射手
三浦
薩摩九郎

一番

北條六郎

遠江太郎

城九郎

横溝五郎

遠江新左衛門尉

小笠原余一

二番

遠江六郎左衛門尉

武田五郎三郎

薩摩七郎左衛門尉

大和次郎左衛門尉

城二郎

上野十郎

檢見

秋田城介

波多野出雲前司

廿三日

辛亥

評定衆中

所勞於不參勤之輩不

可乘著到之由

有其沙汰

不令辭其衆之程者不可

書乘之旨被仰出云

廿四日

壬子天晴

將軍家重而有御演出供奉

人不知其數

先御笠懸也

鶴罝之別當法印

隆辨於

御棧敷伺候之間

令加持御矢云

次大追者有之

射手

一番

北條六郎

城九郎

佐々木臺岐前司

三浦介六郎

遠江新左衛門尉

小笠原余一

東鑑四十一
二

二番

遠江六郎左衛門尉

武田五郎三郎

幸嶋二郎

信濃四郎左衛門尉

城次郎

上野十郎

三番

小山出羽前司

氏家餘一

加地五郎次郎

土肥左衛門四郎

薩摩九郎

工藤六郎左衛門尉

檢見

秋田城介

出雲前司

九月大

五日 壬戌

武藏國務條々事并西海諸國守護

地頭沙汰之事等有評定是皆可救窮民之御計也
清左衛門尉深澤山城前司等為奉行

十七日 戊戌 出舉利錢之事所領於入流者被

下御教書之由其外相論者可有一向問注所之沙

汰之由被定云

十九日 丙子 相州為果宿願令參詣三嶋之社

給依然今日被始御精進云

廿日 丁丑 評定奥州申被沙汰讚岐國海賊張

本等子關東召下可被遣夷嶋之由云

廿三日 庚辰 相州三嶋之社為御奉幣伊豆國

御進發

廿五日 壬午 今日未刻幕府御馬 繕毛殿 於御

東鑑四十一

二

歷邊斃是御秘藏之御馬也號清海波云
廿八日 乙酉 相州三嶋之社御還著往及無其
難云。

閏九月小

一日 戊子 園城寺之事日來有其沙汰及御助
成畿内散々御領乃責為彼料足也北院坊舍并鎮
守社等被造營云清左衛門尉奉行云
十六日 癸卯天晴 戌刻天變出現火耀芒悉見
人怪之

十七日 甲辰 依變異之于事御祈禱可有之由
雖被仰下常度之變穴勝不可及御沙汰之趣司夫
等申之仍可被差置唯眼見心知雖謂之慶雲壽皇

星見之旨申歟云

十月小

七日 癸亥天晴 藥師堂谷燒亡延二階堂大略
南宇佐義判官荏柄家於到云
八日 甲子 戌刻相州新造御弟小御移徒
十三日 己巳 貢馬見叅奥州以下出任如禮云
十九日 乙亥天顔快晴 將軍家并二品相州新
造御弟入御今夜御止宿也
供奉人
將軍御方

前右馬權頭
相摸右近大夫將監

武藏守
陸奥掃部助

上野前司

小山出羽前司

和泉前司

佐々木壹岐前司

薩摩前司

城九郎

遠江二郎左衛門尉

遠江六郎左衛門尉

肥後次郎左衛門尉

彌次郎左衛門尉

伊豆太郎左衛門尉

常陸二郎兵衛尉

新由三河前司

内藏權頭

後藤壹岐守

大隅前司

伊賀前司

大曾祢左衛門尉

三浦介

和泉次郎左衛門尉

豐後四郎左衛門尉

薩摩七郎左衛門尉

田中左衛門尉

武藤次郎兵衛尉

狩野五郎左衛門尉

壹岐新左衛門尉

足立太郎左衛門尉

二品御方

備前々司

越後五郎

陸奥四郎

同次郎

下野前司

梶原左衛門尉

出羽次郎左衛門尉

同四郎左衛門尉

攝津新左衛門尉

善左衛門尉

遠江前司

武藏四郎

秋田城介

出羽前司

遠山前大藏少輔

大曾祢次郎左衛門尉

隱岐新左衛門尉

彦次郎左衛門尉

出雲五郎左衛門尉

阿波四郎左衛門尉

土肥左衛門四郎

小野澤次郎

彌善太郎左衛門尉

三村新左衛門尉

紀伊五郎左衛門尉

伊勢加藤左衛門尉

山城次郎左衛門尉

廿日 丙子 將軍家并二品相州從御弟還御亭

主御引出物等被令獻之云今夜太白輿驚鬼云云

太將軍廢云

廿一日 丁丑天晴 北風嚴寒氣殊甚今日相州

新誕若公五十月百日之義有之云

廿三日 己卯 丑尅雷鳴一聲地震兩度云

廿九日 乙酉 奥州相州并評定眾等於幕府別

參御所良唯評定所之屋可被建之由有其沙汰被
尋陰陽道輩之處丑寅之方遊年也今年中不快之
由依勘申而被止其義云

十一月六

十二日 丁酉 戊尅將軍為御方違而奥州第入

御前右馬權頭武藏守遠江守以下供奉相州被參

請云是明年可被建小御所其地為南方之間依當于

太白方也又日來改御殿御寢所可被用他處云

十三日 戊戌 戊尅禪定二位家有御移徙之義

龜谷新造御弟入御被用御輿散位廣賢朝臣候及

閑賜祿二衣 右近大夫仲親役之

扈從直垂立烏帽子

武藏守

遠江前司

相摸右近大夫將監

越後五郎

内藏權頭

小山出羽前司

和泉前司

長門前司

伊賀前司

出雲前司

上野三郎兵衛尉

和泉二郎左衛門尉

尾張前司

陸奥掃部助

北條六郎

武藏四郎

安藝前司

出羽前司

越中前司

大隅前司

内藤肥後前司

伊勢前司

梶原右衛門尉

信濃四郎左衛門尉

伊賀二郎左衛門尉

肥後二郎左衛門尉

出羽二郎左衛門尉

下野七郎

佐々木壹岐三郎

十四日 己亥天晴

十五日 庚子天霽

別當坊奉入勸請云。

十八日 癸卯

酉 尅雀右

廿二日 丁未

大須賀左衛門尉

葛西新左衛門尉

豐後四郎左衛門尉

城三郎

寅尅太白迫犯鎮星

以大菩薩之御影鶴置之于

兩降京都之飛脚到著去十四日

遷化日來食之由申

伊勢前司為行經使節上洛依雀

給餞物云。

東鑑

二

廿七日 壬子 諏方三郎盛經為相州御使而上
洛是又雀右御訪事也
廿九日 甲寅天晴 於相州御第被信讀大般若
經關東安全御祈也

十二月六

二日 丁巳 宮内少輔泰氏朝臣所領於下總國
恒生庄潜被遂出家年三十六 即年來遂素懷偏
山林斗藪之志挾焉是右馬頭入道正義嫡男也
三日 戊午 鎌倉中在之處々小町屋及買賣設
之事可加制禁之由日來有其沙汰今日被置彼所
所此外一向可被停止之旨嚴密觸之被仰之也
政渡大夫判官基政小野澤左邊大夫入道光連等

奉行之云。鎌倉中小町屋之事被定置處々

大町 小町 米町 龜谷辻 和賀江

大倉辻 乘飛和坂山上

不可繫牛於小路事

小路可致掃除事

建長三年十二月三日

五日 庚申 諏方兵衛入道之邊聊物念夜半之
刻入々加示具是於相州御第門前窺衆依無其實
而悉退且又被加制止云凡荒說非一云

七日 壬戌 宮内少輔泰氏自申出家之過依之
所領下總國恒生庄被召離之陸奥掃部助實時給
之是不諧之上小侍別當勞依危也當庄者泰氏朝

臣始拜領之地始而入部之刻於此處有遂素懷不
思議不謂之乎然泰氏朝臣各以為相州縁者其上
父左馬頭入道為關東宿老頗雖嘆子紬申依人而
不可極法之由及御沙汰云云
十二日 丁卯 相州御第轉讀大般若經有諸願
云云

十七日 壬申 將軍家為御方違而武藏守朝直
第入御從幕府并相州御第警巡頗嚴密云云

廿六日 辛巳 雹降 於地積之事三寸今日未尅
之及一點而世上物念也近江大夫判官氏信武藏
左衛門尉景頼生虜了行法師矢作左衛門尉千葉
親長次郎左衛門尉久連等件之輩有謀叛之企云云

仍詔於兵衛入道為蓮佛之承推問子紬大田七郎
康有而記詞逆心悉顯露云其後鎌倉中彌騷勤諸
人競集云云

廿七日 壬午 天晴 被誅謀叛之衆又有配流之
者云近國御家人群衆如雲霞皆以可歸國之由被
仰出也

建長四年壬子

正月小

一日 丙戌 天晴 椀飯相州御沙汰

御劍 前右馬權頭 御調度 尾張前司

御行騰 秋田城介
 一御馬 武藏四郎 同五郎
 二御馬 遠江六郎 尾張二郎
 三御馬 加地太郎左衛門尉 壹岐三郎
 四御馬 肥後次郎左衛門尉 同四郎左衛門尉
 五御馬 北條六郎 尾張二郎
 二日 丁亥雪降 梶飯奥州御沙汰
 御劔役 武藏守 御調度 備前之司
 御行騰 出羽前司
 三日 戊子天霽 梶飯左馬頭入道有沙汰
 御劔 尾張前司 御調度 秋田城介
 御行騰 和泉前司

今日將軍家并若君御前御行始相州第一御
 五日 庚寅天晴 評定始也奥州相州以下出仕
 其後御臺所御行始奥州第二品信濃民部大夫入
 道行然家渡御云
 七日 壬辰 子丑二時世上騷動諸人競馳著甲
 冒揚旗幕府并相州御第馳衆及曉更靜謐云
 八日 癸巳 幕府心經會也將軍家御出座如例
 九日 甲午天晴 於相州御第室家御懷難為祈
 禱被始行於藥師護摩云若宮法印奉社之云
 十一日 丙申雨降 酉刻雷鳴一聲今日鸚鵡若
 宮御供飯半二破又三百餘枚積慶之餅顛落次同
 御殿與舞殿之間樋之内鷄一羽死此外太慈寺前

河中鷄北一羽死也。

十二日 丁酉天晴

今夜戊尅有珎是刑部僧正

長賢之靈也。十三歲少女。伊勢前司即等女令小託承又年

中之旨之語申云。件女遽有狂氣于長能僧都可對

面之由所望之間其母不能抑留。慙令同輿。長能大

倉坊行向於途中。少女之自輿於僧都之家中。馳入

長能令揭焉之間。語以往之事。長能自聽焉。頗執信

時依彼母之勸。併加持之。試之。少女云。隱岐法皇之

為御使而從去比。於關東令下向。日來令住相州第

之處。隆辨法印陪彼亭而轉經之間。護法天等拄杖

件類被追出。畢於今者歸洛之時。院御所申焉。而之

後。明年重而可下向也。當時荏柄有後山之間。自於

被見此女姓之許。今更不思儀乎。云。詞終令絕入之
時移。遽雖欲蘊生。為心神惘然云。

十三日 戊戌 右大將家於法華堂被行恒例御

事。然工藤三郎右衛門尉光泰為奉行。參堂。次去夜

天狗靈託事。歸衆之後。相州申之間。召彼少女之母

出。就尋給言上。委細。今更信法驗。令仰給云。

十四日 己亥天晴。有御弓始。然多賀谷五郎景茂

被加清撰記。今日欲加射手之處。今朝以相州安東

左衛門光成。為御使。而可然依不在射手可被止之由

被仰小待所。仍被止之間。合手海野四郎助長。同被

止之。所殘之十人。射二五度云。

射手

一番

二宮彌次郎時光

平井八郎清頼

二番

桑原平内盛時

山城三郎左衛門尉忠氏

三番

棗右近三郎

眞板五郎次郎經朝

四番

横溝七郎五郎忠光

布施三郎行忠

五番

武田七郎五郎政平

早河次郎太郎祐泰

廿七日

辛巳 未 尅海濱波濤色如紅就中自由
比浦至和賀江嶋如此諸人怪焉仍被行御占之處

吉事云

二月大

一日

乙卯天晴

巳一 點月三分正現

八日

壬戌天霽

子尅燒亡西之壽福寺之前東

十日

甲子

鎌倉中狹小路之事無承之旨鞍置

馬常後立之事

飛脚不日出來之時於田舎立之事

此條々殊誠及御沙汰保々奉行人等被仰付處也

十二日

丙寅天晴

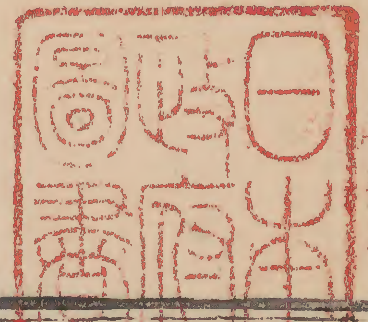
關東安全為御祈於相州御

第被行如意輪法云

廿日

甲戌

和泉前司行方武藤左衛門尉景頼



為使節上洛是與州相州當將軍被辭執權申上皇
第一三宮之間可有御下向之由依申請也其狀相
州自染筆與州被加判處也他人不知之云

廿七日 辛巳 辰刻京都飛脚衆著去廿上戊魁

法性寺禪定殿下薨之由申之仍與州相州以下人
人群衆云彼薨御事云有說等武家可有籌策之期
也云

廿八日 壬午天晴 申刻自腰越海上至和賀江

津而池之水如血廣三丈許及晚消滅畢三河前司
教進勘文云有漢家例之上去建保年中以後於
此境此變及度々云

新刊吾妻鏡卷第四十一

